ＢＩＧＢＯＳＳと彼の部下を学園黙示録の世界にぶち込んでみた。

M16A1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＩＧＢＯＳＳと彼の部下を学園黙示録の世界にぶち込んでみた。

【Ｎコード】
Ｎ２１８５Ｚ

【作者名】
Ｍ１６Ａ１

【あらすじ】
１９７６年、アフリカの某国で戦っていたスネークと彼の部下は気が付くとなぜか学園黙示録の世界にいた。スネークたちは＜奴ら＞と戦いつつ自分達の世界に帰る方法を探る。
※作者はアニメ版しか見ていません。

プロローグ

１９７６年アフリカ

アフリカの乾いた大地で男達が戦っていた。

男達を率いていたのはスネーク、ＭＳＦ（国境なき軍隊）の最高指令でまたの名をＢＩＧＢＯＳＳと呼ばれる男だ。

「ボス、ここはもう持ちそうにありません！敵の攻撃が激しすぎます」

スネークの部下の一人、コードネームホーネットがスネークに言った。

なにしろこちらはスネークを含めて４人なのに対し、敵はこちらの十倍の兵力で攻撃してきており、

さらに装甲車まで従えていた。「ボス、ご命令を！」

ホーネットが言った。部下の全員が彼の命令を待っていた。

スネークはしばらく考えて言った。「・・・撤退だ」

「撤退するんですか？」

ホーネットがそう聞き返してきた。「この兵力で戦況を覆すのは難

しい。ここはいったん引くべきだ」

スネークはそう断言した。「わかりました。お前ら、撤退だ。」

ホーネットはそう言って、残りの二人の部下ーコードネームはそれぞれジョンソンとトムだーに撤退することを伝えた。その時、スネークたちの耳に何かが高速で回転する音が聞こえた。

そしてすぐにその音の発信源があきらかになった。「武装ヘリ《ガンシップ》だ！」

ホーネットが叫んだ。「逃げろ！」

スネークはそう言い、自身も駆け出した。それと同時にヘリからミサイルが発射された。

ミサイルは直撃こそしなかった。しかし、ミサイルの爆風に吹き飛ばされ、スネークは意識を手放した。

プロローグ（後書き）

ご意見ご感想おまちしております。

【ＯＰＳ　００１　】状況を把握せよ

スネークはすばやく身を起こした。

スネークはあたりを見渡しながら呟いた。「ここは・・・どこだ？」

その時、後ろから唐突に足音が聞こえた。スネークはすばやく後ろを振り向いた。

「大丈夫ですかボス？」後ろには彼の部下が３人とも居た。

「ああ、どこも問題はない。それよりもお前達はどうだ？」

スネークは部下が全員居るのを確認して問うた。

「はい、三人とも無事です。ところでボス、ここはどこなんでしょう？どうみても先ほどまでわれわれが

戦闘していた場所には見えないのですが？」「さあな、俺にもわからん。多分学校のようなところだと思

うが・・・」

スネークはそう言いながら武器や装備を確認していた。幸い武器や装備はすべて無事だった。

その時、スネークに無線がかかってきた。「スネーク、無事だったか！」

無線の相手はＭＳＦの副指令を勤めているカズヒラ・ミラーだった。
「ああ、他の連中も無事だ」
「それはよかった。すぐに向かえをよこす。今どこにいるんだ？」
「それが俺にもわからん」
「わからないって、それはどういうことだ？」「そのままの意味だ。俺達はアフリカの砂漠地帯で戦っていた
はずなのになぜか気が付いたら学校のようなところに居た。しかも気候もアフリカとは違う。
しいて言えば北東アジアのどこかだろう。」
そう言ったスネークの目にある物が映った。それはどこにでもある案内板だった。それに書かれている
文字を見たスネークはミラーにこう言った。「もしかしてここは日本かもしれない」
「日本？なぜそうだと思った？」「案内板には日本語が書いてあった」「それは本当か？俺にも見せてく
れあれを使えば出来るだろう？」あれとは画像転送装置のことである。その装置は外見はカメラに小型の
無線機を取り付けた物で、それで撮影すると、画像が電子データにされて、自動的にマザーベースに送ら
れるという物で、今回の作戦で試験的に導入された物だった。スネ

ークは案内板を撮影した。

しばらくしてミラーから返事が返ってきた。「たしかにこれは日本語だ。いったいこれはどういうことな

んだ？アフリカで戦っていたはずのあんた達が日本にいるなんて」

「さあな、俺達にもわからない」

無線が終わると、スネークは言った。「ここがどこなのか確かめにいくぞ！」

スネークたちは校内を探索していた。すると、スネークたちの前に一人の男が立っていた。

どうやらこの学校の教師らしい。「おいあんた、少し聞きたいんだが、ここはいったいどかなんだ？」

スネークはその男に話しかけた。するとその男は何を思ったのかいきなりスネークに襲い掛かってきた。

不意をつかれたスネークはその男に地面に押し倒された。「な、何をする・・・」

スネークはその男を引き離そうとした。すると、「ボスから離れろ！」

と言う声が聞こえ、すぐに男がスネークから引き離された。

見ると、トムが男を羽交い絞めにしていた。「大丈夫ですか、ボス」

すぐにホーネットが駆け寄ってき

た。「ああ」スネークはそういった。すると、「ああ、クソ！」という声と何かを叩きつける音が聞こえた。

「どうした？」スネークが尋ねると、トムは「こいついきなり俺に噛み付いてきやがったんですよ」

と興奮した口調でいった。見ると、トムに投げ倒されたのか、さっきの男が地面に倒れていた。

スネークはとりあえずふたたび起き上がろうとした男を拘束し、ロープで近くの柱に縛り付けた。

それからスネークたちはまた校内を捜索することにした。

しばらく探索しているうちに、スネークは違和感を感じた。（何かがおかしい）

スネークはそう思った。さらに探索していると、学校の校舎のような建物が見えてきた。

しかしおかしいのは、その建物から悲鳴が聞こえていたのだ。しかも大量のだ。

そして窓から生徒らしき人影が見えたが、みな何かから逃げ惑っている様子だった。

「銃の安全装置を外しておけ」スネークは部下に声を掛け、自分も所持しているＭ１６Ａ１アサルトライフル

の安全装置を外して、いつでも撃てるようにした。

そして、ついに校舎の扉を開けた。

【ＯＰＳ　００１　】状況を把握せよ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

【ＯＰＳ　００２】安全地帯へ退避せよ

スネークたちは扉を開けた。そして校舎に侵入した。あいかわらず悲鳴は聞こえていたが、徐々に少なく
なっていくようだった。そして廊下には大量の血痕が付着していた。スネークたちは周りを警戒しながら
進んでいった。そして廊下の突き当たりに出た。すると廊下の先の階段で男子生徒と女子生徒が
組み合っていた。すると足音に気づいたのか男子生徒がこちらに顔を向けて「あんたら助けてくれ」
と叫んだ。しかし次の瞬間、その男子生徒は女子生徒に首筋を食いちぎられた。男子生徒は首筋から血を
噴出して倒れた。そして女子生徒は男子生徒の死体に喰らいついた。
それを見たスネークたちは目を疑った。これまで幾多の戦場を渡り歩いてきたスネークたちもこのような
光景は見たことがなかった。スネークたちはなるべく足跡を立てないようにその場を離れようとしたが
ホーネットが足を滑らせて転倒した。その音で女子生徒はこちらを向いた。そしてこちらに向かってき
た。その直後、叫び声とともに銃声が聞こえ、女子生徒が吹っ飛ん

だ。ジョンソンが恐怖のあまり所持し
ていたスパス１２ショットガンを女子生徒に向け、撃ったのだ。
「やったか」ジョンソンはそう口走ったが、女子生徒は胸に１２ゲージ弾を浴びたにもかかわらず平然と
起き上がった。「な、なぜだ。ちゃんと当てたのに」ジョンソンがそう言う横でスネークはＭ１６Ａ１
で女子生徒の頭部を狙った。付属しているレーザーポインターの赤い光点が女子生徒の頭部に当たった。
その瞬間、スネークはトリガーを引いた。銃声が響き、女子生徒の頭部を５，５６ｍｍ弾が貫き、
女子生徒はその場に崩れ落ちた。スネークは女子生徒を倒せたことに安堵した。しかし、銃声を聞きつけ
てさっきの女子生徒のような奴が次々と集まってきた。「頭だ！奴らの頭を狙え！」スネークは部下に
そう言うと、自らも奴らに銃撃した。しかしいくら倒しても敵が次々に現れ一向に減らなかった。
「このまま奴らを相手にしていてはきりがない。とりあえずいったん退くぞ」
スネークは部下に告げた。そしてスネークたちは敵に銃撃を加えつつ、出口に向かおうとしたが、

敵が多すぎるので、スネークたちは出口に向かうのをあきらめ、校舎内の安全な場所で態勢を整える

ことになった。そしてスネークたちは立てこもるのに最適な部屋を見つけた。

「俺がここが安全か調べるからお前達はここで奴らをくいとめておけ」スネークはそう言うと、

部屋に突入した。そして部屋をクリアリングしたが、敵の姿は見当たらなかった。

「クリア」スネークは部下にそう声を掛けた。すると彼の部下が次々に部屋に入ってきた。

最後に外でＲＰＫ軽機関銃で敵に掃射を加えていたホーネットがスネークたちに合流した。

そしてホーネットが部屋に入ってきたと同時に部屋の扉が閉められた。

「いったいなんなんだあいつらは！」スネークは誰に話しかけるでもなく怒鳴った。

「奴らは映画で見たゾンビそっくりでした。もしかしてここにいる奴らも・・・」

ホーネットがそう言いかけた。するとジョンソンが「馬鹿な！ゾンビなんて非科学的なものがいるはずな

いだろ！」と怒鳴った。その直後、建物の外から轟音が響いてきた。スネークは部下を黙らせると、窓を開けて窓の外を見た。すると、校舎の上空を大量のヘリコプターが通

過するのが見えた。そのヘリは民間用のヘリではなく、前にミラーも所属していたという自衛隊と呼ばれ

る組織のものだった。（自衛隊が出動するほど事態は逼迫しているのか）

スネークはそう思った。

その直後、トムが急に咳き込み始めた。「おい大丈夫か」

異常に気づいたホーネットがトムに駆け寄った。すると、トムはいきなり口から血を吐き出した。

「どうしたんだいったい！どこか怪我でもしたのか！」吐血したことに驚いたスネークはトムに駆け寄っ

た。「だ、大丈夫です」トムはそう言って立ち上がろうとした。

「どう見ても大丈夫には見えないぞ！しばらくそこで休んでろ」スネークはそう言った。

そして何気なく窓の外を見た。窓の外では相変わらず人が人を食らう非現実的な光景が繰り広げられてい

た。すると二人の男子生徒が逃げているのが見えた。するとその内の一人が奴らに捕まり腕に噛み付かれ

た。すぐにもう片方の生徒が引き離し、二人はまた逃げ出したが、しばらくすると噛まれたほうの生徒の

様子が急におかしくなった。その様子はさきほどのトムの様子にそっくりだった。やがてその男子生徒は

ぴたりとも動かなくなった。もう片方の生徒はその生徒の様子に動揺しているようだった。

するとさっきまでぴたりとも動かなかった生徒がゆっくりと起き上がった。

それをみてもう片方の生徒が安心したようにその生徒に話しかけたが、その生徒は話しかけている生徒の

肩を掴むと、首筋にかじりついた。そしてその男子生徒は息絶えた男子生徒の死体にかじりついた。

「ボス、これはいったい・・・」ホーネットが窓の外を驚愕に満ちた顔で問いかけた。

「どうやら奴らに噛まれたら奴らの仲間入りになるようだ」

スネークはそう言った。その直後、「なら俺も奴らの仲間になるのか」

とトムが呟いた。どうやらトムもこれを見ていたらしい。

そしてまた血を吐き出した。その後こう言った。

「ボス、俺はもう長くは持ちません。なので俺を撃ってください。俺は奴らみたいになりたくありませ

ん！」トムがそう言った。「何を言ってるんだ！お前が奴らみたいになるわけないだろう！」

ジョンソンがトムに向けて怒鳴った。その直後、トムが血反吐を吐いて床に倒れた。

「そろそろ俺も年貢の納め時みたいだ。最後にこれだけは言いたい・・・ホーネット、ジョンソン

お前らと戦えて本当によかった。そしてボス、俺はあなたの部下になれて本当によかったです」

トムは最後にそう言うと、息を引き取った。

「そ、そんな、嘘だ、少し噛まれただけなのに」ジョンソンがそう言っているなかスネークはホルスター

からＭ１９１１Ａ１のカスタムモデルを抜くと、トムの亡骸の元へ向かった。

そして銃口をトムの頭部に向けた。

「ボス、何をしてるんですか？」トムの横ですすり泣いていたジョンソンが尋ねた。

「こいつの願いをかなえてやるんだ」スネークはそう言って安全装置を外した。

「ま、待ってくださいよ！まだトムが死んだとは決まってないじゃないですか！」

ジョンソンがそう言った直後、トムの指先がぴくりと動いた。そしてトムはゆっくりと起き上がった。

「ほ、ほら、やっぱり俺の言うとおりだ・・・」ジョンソンは当のトムの様子を見て息を飲んだ。

トムの様子はさきほどと比べて顔に生気をまったく感じられなかった。

「離れてろ」スネークはそう言ってジョンソンを押しのけた。その直後、トムがスネークたちに

襲い掛かってきた。「すまない」スネークはそう呟くとトリガーを引いた。

校舎内に一発の銃声が響き渡った。

【ＯＰＳ　００２】安全地帯へ退避せよ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

【ＯＰＳ　００３】民間人を救出せよ

あれからどのくらいたっただろうか。スネークたちには何時間もたったようにも数分間しかたっていない

ようにも思えた。しかしいつまでもこうしてはいられないことをスネークは自覚していた。

「そろそろここを出よう。ここもそろそろやばそうだ。」

スネークはドアの隙間から外の様子を確認しながら言った。外にはすでに奴らが大量に集まっていた。

そしてスネークはトムの亡骸からＰＴＲＳ１９４１スナイパーライフルとＰＭハンドガン、そしてそれらの

弾薬と他の武器、装備品をすべて回収した。そのころには他の部下も仲間の死から立ち直っていた。

そしてスネークは言った。「いいか、できるだけ戦闘は避けるようにするんだ。あとむやみに銃を撃つ

な。命取りになる。そして最後に・・・絶対に生き残れ！これは命令だ！」

「了解しましたボス！」返事を聞いたスネークは満足そうにうなずいた。そして「行くぞおおおお！」

と叫んだ。そしてジョンソンが扉の前に立ち、ショットガンで奴ら

のだいたいの頭の位置に照準を

合わせると、ドアごしに弾倉内の弾が尽きるまで連射した。そして扉を開けると、案の定奴らは頭に

１２ゲージ弾を食らって即死していた。そして３人は室外へと飛び出した。

そして足音を立てないように廊下を進んでいった。その過程で奴らは視覚や感覚がなく、音に反応するこ

とも解った。そして学校の出入り口付近にまで近づいた。（あとはあそこから外に出るだけだ）

スネークはそう思っていた。その時、当の出入り口から悲鳴が聞こえた。

その悲鳴の主は若い女性らしい。「どうしますか？」ホーネットが聞いてきた。

彼女を助けに行くか聞いているのだろう。その問いに対してスネークは少し考えたあと言った。

「助けにいくぞ！」そう言うと、出入り口に向かって駆け出した。

そして出入り口の近くに奴らが固まっていたのでスネークはＭ１６Ａ１の下部に装着されている

グレネードランチャーで吹き飛ばした。

そして、ついにスネークたちは出入り口に到達した。
するとそこには改造されたネイルガンを持った少年とピンク色の髪の少女、それと大量の奴らが居た。
そしてその内の一体は少女に今にも襲い掛からんとしていた。
「銃は使うな！流れ弾が当たるかもしれん。ＣＱＣ（クロース・クォーターズ・コンバット）を使え！」
スネークはそう言うと、少女に迫っている奴らに向かって駆け出した。
そしてそいつを拘束すると、首の骨をへし折った。ごきりと硬い何かが折れる音がしてそいつは崩れ落ち
た。そしてスネークの存在に気づいたほかの奴らがスネークに襲い掛かってきた。
しかしそれに動じることもなくスネークは奴らを迎撃した。
まず一番前に居る奴を掴んで引き倒し顔面に蹴りを入れた。そして次々に襲い掛かってきた奴らを
殴り倒した。そして他の奴らもホーネットとジョンソンが倒して出入り口にいた奴らは全滅した。
出入り口の安全を確保するとスネークは少女に駆け寄った。「大丈夫か？怪我はないか？」
とスネークは少女に問いかけた。「え、ええ。ところであなた誰？」

と少女は問いかけた。

その問いにスネークは答えた。「俺か、俺はスネークだ」

【ＯＰＳ　００３】民間人を救出せよ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

【OPS　004　彼と合流せよ】

少女が無事なことを確認するとスネークは今度はネイルガンを持った少年のほうに行って同様の質問をし

た。少年のほうも特に怪我などはないようだ。すると、少年が「そ、それはM16A1ですよね？」と

言ってスネークの銃を指差したのでスネークは「ああそうだ。よく知ってるな」と返事をした。

すると少年は「こういうことには詳しいので・・・ところでそれ少しでいいので触らせてくれません

か？」

と言ってM16A1を指差してのでスネークは「あいにくこれはおもちゃじゃないんだ。

そう簡単に触れさせるわけにはいかない。」とだけ答えた。少年はそれを聞いて不服そうに口を

開こうとしたが「おい、大丈夫か！」という声で遮られた。

そして通路から先ほどの声の主と思われる金属バットを持った少年と細長い棒を持った少女が出てきた。

そして彼らが出てきたのとは違う通路から木刀を持った少女と救急キットのようなものを持った女性が

出てきた。そして彼女らの後に一人の男が出てきた。そして彼を見たスネークは驚いた。

「お前・・・スペツナズか？」ホーネットがその男に問いかけた。たしかに彼はスペツナズと

呼ばれるソ連の特殊部隊の兵装をしていた。

ただ他のスペツナズは無地の目だし帽をかぶっているはずだが彼の目だし帽には

Ｊと言う文字が刺繍されていた。

「あ、あんた・・・なんでここに」相手もスネークを

見つけたことに驚いているようだった。「ボス、こいつと知り合いなんですか？」ジョンソンが

問いかけた。「ああ、ちょっとな」とスネークは答え男の方に向き直り言った。

「お前こそ何でここにいるんだ？ジョニー」そしてジョニーと呼ばれた男は「話すと長くなるが・・・」

と言ってここにくるまでの出来事を話し出した。

【ＯＰＳ　００４　彼と合流せよ】（後書き）

ご意見ご感想おまちしております。

番外編　ジョニーを学園黙示録の世界にぶち込んでみた1

スネークたちが目覚めたころ、学園敷地内の別の場所で一人の男が目覚めた。

「・・・ここはどこだ？」その男の名はジョニーだ。彼はついさっきまでソ連領内で警備任務に

ついていた。そして、その彼を謎の光が襲い、気が付くとここにいたと言うわけだ。

（とりあえず本部に連絡をとろう）ジョニーはそう思い、無線機を起動させた。

しかしいくら本部に呼びかけても聞こえてくるのは雑音だった。

本部と通信するのをあきらめたジョニーは今度は武器や装備が無事かどうか確認した。

幸い全ての武器や装備は無事だった。

そして確認が終わったので彼は周囲を探索することにした。

（しかしここはソ連じゃなさそうだ。もっと南の地方らしい）ジョニーはそんなことを思いながら

校内を探索した。その時、悲鳴が聞こえた。悲鳴を聞いたジョニーはとりあえず現場に向かうことにし

た。そして現場に到着したジョニーが見たのは学生と思われる少女がまるでなにかから逃げるように
走っている姿だった。しかし、その生徒にいきなり男子生徒が襲い掛かった。
そして男子生徒は女子生徒の首筋に食らいついた。首筋から鮮血を吹き上げて女子生徒は動かなくなっ
た。そしてその男子生徒は女子生徒の死体から肉を引きちぎり、口に運んだ。
それを見たジョニーはいままで味わったことがない恐怖を感じた。
そして無意識のうちにその場から逃げ出そうとした。
しかし、勢い余って足を滑らせて転倒してしまった。そして、その音を聞いてさきほどの女子生徒の
ような奴らが次々と集まってきた。
それを見たジョニーは急いで起き上がり所持しているＡＫＭを奴らに向け「動くな！これ以上
近づくと撃つぞ！」と警告した。しかし奴らはそんなことは意にも介さず平然とジョニーに近づいてき
た。そしてジョニーは今度は銃を奴らの足に向け撃った。そして奴らの足を７．６２ｍｍ弾が貫いた。

常人なら痛みによって歩けなくなるはずだ。しかし奴らはそれでも動きを止めることはなかった。

（殺るしかないのか・・・）ジョニーはそう思うと、照準を奴らの胸に向けた。

これで後はトリガーを引くだけで奴らの命を奪うことができるはずだ。

しかし、ジョニーは撃たなかった。いや、撃てなかったのだ。

いくら化け物のようでもまだ成人すらしてない子供であることには変わりない。

そしてそれが彼に撃てなくしている要因だった。そうこうしているうちに奴らのうちの一体が

ジョニーに襲い掛かった。ジョニーはやはりトリガーを引けなかったので、奴に組み伏せられてしまっ

た。「く、くそ・・・」ジョニーはそう呟いた。ＡＫＭは組み伏せられたときに弾き飛ばされてしまった。

サイドアームを使おうにも両手は奴を掴むので塞がってしまっている。

そしてこの間にも他の奴らがジョニーの元に近づいていた。

（もはやこれまでか。せめて一度でもいいから家族にまた会いたかった）ジョニーがそう思った次の

瞬間、今までジョニーを組み伏せていた奴が頭に何かを振り下ろされて沈黙した。

そしてジョニーに迫っていた奴らも次々に倒された。

そしてジョニーに迫っていた奴らは全滅した。そしてジョニーの目には木刀を持った一人の少女が

立っているのが見えた。

番外編　ジョニーを学園黙示録の世界にぶち込んでみた１（後書き）

ご意見ご感想おまちしております。

番外編　ジョニーを学園黙示録の世界にぶち込んでみた２

その少女はジョニーを見ると、「大丈夫か？奴らに噛まれてないだろうな？」と聞いてきた。

「あ、ああ」ジョニーはそう答えた。するとその少女は「そうか、それならよかった」

と言うと、ジョニーのＡＫＭを拾い上げて「これは貴方のでしょう？」と言ってジョニーに

手渡した。ジョニーはＡＫＭを受け取ると少女に話しかけた。

「さっきは助けてくれて感謝する。君がいなかったら俺は今頃やつらの餌食になっていたからな。

ところで君の名前は？」「私は毒島冴子だ。貴方は？」「俺か？俺はジョニーだ。スペツナズに

所属している」「スペツナズって特殊部隊の？」「そうだ」「そうだったのか。しかしなぜスペツナズ

がここに？」「それが俺にもよくわからないんだ。ところでここはどこだ？」「どこってここは

藤見学園だが」「いやそうじゃなくて、ここはどこの国なんだ？」

「ここは日本だが」「日本だって！

俺はなんで日本なんかに飛ばされたんだ？」「それを私に聞かれて

もな・・・ところで貴方は

これからどうするんだ？」「俺はここについて何もしらない。だからできれば君と一緒に居たいんだが」

「別にかまわない。だがこれだけは言っておく。奴らはもう人間じゃない。襲われたら躊躇するな。

」それを聞いたジョニーは覚悟を決め「わかった」とだけ言った。それを聞いた毒島は

「それでいい」と言い、ジョニーに奴らの弱点は頭部であることや、奴らに噛まれたら噛まれた者も

奴らになることを話した。そしてそれが終わると二人は廊下を歩いていった。

そしてできるだけ戦闘を避けつつ廊下を進んでいった。そして、ふいに前方から複数の奴らが

襲い掛かってきた。毒島は奴らを迎撃しに向かった。その時、後方からも複数の奴らが襲ってきた。

毒島は前方の奴らの対処に手一杯でこちらの対処は無理だろう。

（俺がやらなきゃ二人とも死ぬんだ）ジョニーはそう思うと、ＡＫＭを奴らに向けた。

そして照準を奴らの頭部に合わせた。（奴らはもう人間じゃないんだ！）ジョニーはそう思うと、

「うおおおおおおおおおおおおお！」と叫びながらトリガーを引き絞った。

銃声とともにＡＫＭから７．６２ｍｍ弾が放たれ、奴らの頭部を穿った。

そして数秒後には後方の奴らはすべて沈黙した。

その頃には、前方の奴らも毒島がすべて倒していた。そして毒島はＡＫＭを持ったまま立ち尽くしている

ジョニーに駆け寄ると、後方にある死体を見やって「貴方がやったんだな？」と尋ねた。

「ああ」とだけジョニーは言った。「大丈夫だ。貴方は間違ったことは何もしていない。」と

毒島はジョニーに言った。ジョニーはそれを聞いていたが突如ジョニーの腹に激痛が走った。

（くそ、何でこんな時に！）激痛の正体はジョニーの持病である下痢である。

「す、少しトイレに言ってくる」ジョニーは腹を押さえながら毒島に言った。

「しかしトイレにも奴らがいるかも・・・」毒島はそう言いかけたが、ジョニーは

「も、漏れる・・・」と言いながらトイレに行ってしまった。

（きっと一人でいたいのだろう）毒島はそう思い、ジョニーを引き止めるようなことはしなかった。

番外編　ジョニーを学園黙示録の世界にぶち込んでみた２（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2185z/

ＢＩＧＢＯＳＳと彼の部下を学園黙示録の世界にぶち込んでみた。

2012年1月12日23時59分発行